スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの教え

日本の青年たちへのメッセージ

敬愛する敬愛するスワーミー・メーダサーナンダ・マハラージ、在日インド総領事アシーム・マハージャン閣下、在日インド商業会議所会頭Ｊ．Ｓ．ダヤル様、そして皆様、本日は、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生誕150周年祝賀記念関西行事という栄えある機会にお招きいただき、お話しさせていただくことをたいへん光栄にまたとても嬉しく存じます。

わたしは先ほどご紹介いただいたように社会的役割としては大学教員をつとめておりますが、こころにおいては、ただシンプルに修行者そして奉仕者でありたいと常に念じております。わたしは1991年にインド・プリーの地でグルにお会いする僥倖を得ました。以来ずっと、わたしの人生の目標はグルがお示しになった道をただひたすらに歩み続けることのみです。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダのお教えは、その霊的な道を歩むにあたって、常に重要なインスピレーションと勇気づけをわたしに与えてくれるものでした。

本日はスワーミー・メーダサナンダ・マハラージのお導きに従い、日本の青年たちに対してスワーミー・ヴィヴェーカーナンダのお教えがどのような意義をもつのか、彼ら彼女たちの問題にたいしてどのような解決策をスワーミー・ヴィヴェーカーナンダは提示されているのかについてお話ししたいと存じます。

ではまず、青年たちが抱えている問題とは何でしょうか？ 現代日本の10代後半から20代の若者たちは、揶揄を込めて「さとり世代」と呼ばれることがあります。彼らは本当に悟っているのでしょうか。もちろんそういうわけではありません。彼らは日本が経済発展を成し遂げて以降、そのピークを過ぎてから生まれてきた世代であり、「失われた20年」と言われる時代に育ってきました。では彼らは不幸だと感じているのでしょうか？そうではなさそうです。

いちおう研究者らしく、すこし統計的数字をみてみましょう。内閣府の『国民生活に関する世論調査』によると、2010年時点で20代青年の70.5％が現在の生活に満足していると答えています。一方、40代は58.2％、50代は55.3％まで満足度が減ります。1960年代後半にさかのぼりますと、20代の満足度は60％程度、1970年代だと50％程度にすぎません。すなわち過去40年間で若者の満足度はもっとも高いという結果になっています。青年たちは自分たちがすでにもっているもの—携帯電話、iPad、Wii、といった電子機器など—で満足しているわけです。私たちの世代の多くとはちがって、バブリーな消費生活にも海外旅行にもあまり興味はありません。将来についてはきわめて現実的で、大きな野心や夢もありません。欲をもたずにまるでさとっているようなので「さとり世代」と呼ばれるわけです。

　しかし本当に彼らは心の平安を得ているのでしょうか？それがそうでもないのです。同じ内閣府の調査では、『悩みや不安がある』と答えた20代は、1980年代後半には40％を切っていたのが、2010年には63.1％にのぼります。これらの統計からは、今の生活に満足しているものの、将来への夢や希望はなく、悩みや不安を抱えている、という現代日本の若者たちの姿が浮かび上がってきます。

　何が問題なのでしょうか？アベノミクスが成功して日本経済がまた上向けば、悩みや不安も吹き飛ぶのでしょうか？そういうわけではないでしょう。

私の見立てでは、日本の青年に欠けているものは、人生をかけられる理想です。人生における理想も高い目標もないので、いわば自分の繭の中にとじこもって、現在あるもので満足しようとしているのです。将来についておそれをもち、今のままでいいと、その繭からでてこようとしないのです。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは何とおっしゃっているでしょうか？「わたしたちは自分で自分に、わたしは小さな存在に過ぎない、わたしは生まれ、そして死んでいくのだ、と常に恐れをいだくように催眠をかけてしまっている。」そして「たちあがれ、この精神で。真理を信じ、真理を実行せよ」「崇高な考え、最高の理想で頭を満たし、それを毎日毎晩目の前にして思い起こせ。それによって偉大な仕事はなしとげられるだろう。」

わたしたちはこの小さな自分への執着を、小さな繭にとじこもった卑小な偽りの満足を、捨てなければなりません。これは青年たちに限ったことではなく、わたしもここにいらっしゃる多くの皆さんにもいえることです。わたしたちが将来について思い悩み心配するのは、崇高な理想を忘れ、真理を忘れ、真我の本質を忘れて、小さな自己にしがみつこうとするからです。わたしたちは本質において、あのスピリット、存在そのもの、意識そのもの、歓びそのもの、サットチットアーナンダに他なりません。わたしたちに欠けているものなど何もないのです。わたしたちの本当の自分、真我は、遍在し、永遠で、完全無欠なるアートマンです。プルナマダ、プルナミダム、プルナート、プルナマダッチャテー、プルナッシャ、プルナマーダヤ、プルナメーヴァ、ヴァシッシャッテー、「それは満ち満ちたものであり、その満ちたものは満ちたものより生まれた。その満ちたものが満ちたものに加わっても、それは満ちたもののままである。」イシャ・ウパニシャッドからの一節です。わたしたちはその完全無欠なる満ち満ちたものそのものなのです。それなのに、わたしたちはこの身体の小さな快楽が失われはしないかとおそれているのです。なんとばかげたことでしょうか。

ここでスワーミー・ヴィヴェーカーナンダもお話しになった、ヒツジライオンについて皆さんにお話しさせていただきたいと思います。この話はとてもよく知られているので皆さんもご存じかもしれませんが、これはわたしがとても好きな話ですので、お許しをいただきたいと思います。

あるところに子どもをおなかにもった雌ライオンがいました。獲物をさがしていたところ、羊の群れをみつけて襲おうとしましたが、うまくいかずにそこで子どもを生んで亡くなってしまいました。残された赤ちゃんライオンはヒツジの中で育ったので、自分のことをヒツジだと思い込み、ヒツジのようにメーメーと鳴いて暮らしました。メーというのはヒンディー語で「私」「自分」のことです。つまりライオンは自分がほんとうは誰かをすっかり忘れてしまい、自分はこの小さなヒツジだと思い込んでしまったのです。ある日、他のライオンがこのヒツジの群れをみて、そこに小さなライオンがいるのをみておどろきました。その小さなヒツジライオンは、他の羊と同じように、そのライオンをみると恐れて、メーメー鳴きながら、逃げていきました。それである晩、ヒツジライオンが寝ているときに、そのライオンはこっそりとちかづいて、「おいおい、」「ひゃっ！」「おどろくな、おまえはライオンなんだぞ」と言いました。それでもヒツジライオンは、「わたしはヒツジです、めーめー」といいました。真理の教えを受けても、それでも小さな自分にしがみつこうとしたのです。それでライオンは「ちょっとこい」といってこのヒツジライオンを湖につれていき、水面に映る二匹のすがたをみせました。ヒツジライオンは自分の姿とライオンの姿をみくらべて、ようやく自分はライオンなのだとさとりました。ヒツジライオンはもうメーメーとは鳴かなくなりました。ライオンはどう鳴くでしょうか？オームです。このオームとは、永遠なるブラフマンの響きです。もうメーメーという小さな自分から離れて、オームの響きに現される本来の真我をさとったのです。私たちはみんなライオンです。私たちは永遠で完全無欠なる魂なのです。

ところで日本の神社仏閣では、入り口に二匹の狛犬または獅子がいらっしゃいます。向かって右側の獅子は口をあけて「あ」といっており、左側の獅子は口を閉じて「うん」といっています。二匹を合わせて「あうん」、あうんの呼吸のあうんですが、アウンはオームからきたことばです。獅子たちは、永遠無限の実在について、わたしたちの真我について、神社仏閣の入り口で思い出させてくれようとしているわけです。ですから、次のお参りの際に二匹の獅子を見かけたら、ぜひオームと心の中で唱えてください。ライオンのようにオームと吠えてもいいかもしれませんが、それはまわりに人がいないかをたしかめてからのほうがいいでしょうね。

　　 わたしたちはライオンです。わたしたちは永遠無限のアートマンです。ですから「メーメー、わたしわたし」と鳴くのはもうやめて、オームと叫びましょう。小さな自分への執着を捨て、とじこもった繭をうちやぶり、本当の自分、真我を知ることにより、わたしたちはすべてのおそれから自由になります。

　おそれのないこと、はスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの教えにおいても重要な位置を占めています。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダのお言葉を引用しましょう。「おそれがあるとき、あなたは何ものでもない。この世のみじめさはおそれを大きな原因とする。もっともひどい迷信はおそれだ。わたしたちの悲しみはおそれによるものであり、おそれをなくすことによって、わたしたちは今ここで天界を得ることができる。」ヒツジライオンがライオンをおそれるのは、ヒツジライオンが自分をヒツジだと思い込んでいるからです。わたしたちが自分はライオンであること、本来の真我を知れば、いっさいのおそれはなくなり、ライオンのようにオームと吼えることができるでしょう。

小さな自己を捨てるということ、自分の周りに作った快適な小さな繭をうち捨てるということは、しかし、自分の身体や身の回りはほうっておけということではありません。この身体は魂の乗り物であり、人生の旅で目的を目指すためには、この身体という乗り物の面倒をみる必要があります。それは車を維持するのと同じです。生をうけこの世で生きている以上、きちんと自分の身体そして身の回りの世話をする必要はあります。ただ実は、私自身は身の回りの世話をすることがとても苦手です。どうも研究者のくせなのでしょうか、考え事に没頭すると、いろんなことを忘れてしまうのです。たとえば、わたしはときどき、まあ妻によるとしょっちゅうですが、外出するときに家の鍵をかけるのを忘れることがあります。わたしのグルは、そうした忘れっぽいわたしのことをよく「おまえは神様にすべてをまかせているからな。それでまったく心配なく気楽でいられるんだ」とよくおからかいになったものです。グルは、こうしたことをとても甘美な調子で、チャーミングにおっしゃったものですから、わたしはただただ恥じ入ると同時に、とてもうれしくありがたく思ったものでした。もちろんやさしい妻からはよくおこられるのですが、それは当然のことです。妻はまったく正しい。うちに誰もいないときは鍵をかけるものです。

　しかし、自分の心に鍵をかけてはなりません。心の扉はつねに開けておく必要があります。心の中には誰もいないのでしょうか？そこには魂が、真我が、パラムアートマンがいらっしゃいます。神仏がいらっしゃるといってもよいでしょう。わたしたちの体と心は神的なるもの、霊的なるものの聖なる入れ物なのです。わたしたちは、自分たちの体と心が、そこにやどる永遠の魂にふさわしいものであるように、それを常にととのえ、その最高存在といつもともにあるように、そしていつの日にかそれとひとつになれるように、心の扉を開けておく必要があります。

　 どうやったら心の扉をあけ、その内奥にある最高存在を知って、それとひとつになれるのでしょうか。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは次のようにおっしゃいます。「すべての存在は神的な可能性を秘めている。自分たちの内面と外面の性向を統御し、その神的なものをあらわしめることこそが目標である。」そしてその目標を達成するためには四つの道、方法があります。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダによると「ヴェーダンタの教えで最も偉大なのは、異なる道を通じて同じ目標につくことができるということだ。その道を私は四つにまとめた。行為の道、信愛の道、心理操作の道、知恵の道である」。これらの四つの道は、四つのヨーガの道に対応します。ヨーガとは結号を意味します。ふたたびスワーミー・ヴィヴェーカーナンダによるとによると「行為の道（カルマヨーガ）をいくものは、人間とすべての人類の結号、心理操作の道（ラージャヨーガ）をいくものは、低次の自己を高次の自己へと結合すること、信愛の道（バクティヨーガ）をいくものは、自分と愛する神を結合すること、そして知恵の道（ギャーナヨーガ）をいくものは、すべての存在者を結号することです」。

そしてこれらの四つのヨーガは、ひとつひとつでもできますし、実践的に組み合わせることもできます。知恵の道を通じて、実在と非実在、永遠なるものとうつろいゆくものを弁別して、非実在の小さな自己を捨てようとすることができます。これはたいへんな努力が必要になりますが、ここに信愛の道を組み合わせて、心を信愛の対象たる神に集中することができれば、小さな自己をすてることはより容易になります。さらに行為の道を付け加えて、小さな自分のためにではなく無私の精神で、すべての人びとの心のなかにおられる神への奉仕として自分の義務をなすことができれば、行為の道、知恵の道、信愛の道、（あるいは行、知、信）はそこにすべて交わっています。さらには、ラージャヨーガをつうじて、こころをおちつかせ、内面の平安をえることができれば、鬼に金棒です。

　 スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、行、知、信の完全なる組み合わせについて、師たるシュリー・ラーマクリシュナから教えを受けました。それは“Shiva Jnane Jiva Seva”「生きとし生けるものを神と知り、奉仕をなせ」というものです。ここには、遍在する霊の智慧、神への信愛、そして無私の行為のエッセンスがひとつにまとまっています。これはこの世に生きるわたしたちにとって、至高の目標に達するための、もっとも実践的でかつ最高の道であると言えるでしょう。

　　　　「生きとし生けるものを神と知り、奉仕をなせ」という教えは、とても美しくまたすばらしいものですが、それを実践するのは簡単なことではありません。他のひとの本質は神であると思おうとしても、この世の中では、しばしば逆に悪魔をみて、おこったり、かなしんだりしがちです。ただ実はそこで他の人にみている悪魔は、自分自身の浅はかな心の投影に過ぎないのです。そこであきらめてはいけません。そうした経験は、自分自身を浄化していくに必要なプロセスです。忍耐強く、行、知、信の道を歩んでいけば、だんだんと他の人の神的な性質、この世に充ち満ちている神聖なるものの存在に気付いていきます。そしてこの世界が神に満ちていることに気付いていくと共に、自分の心のなかにある神聖なるものにも気付いていくことになるでしょう。

　修行と奉仕はけっして容易な道ではありません。が、それを進もうとする小さな努力は、少しずつより深くより大きな歓びを人生にもたらしてくれます。わたしはグルの弟子として、今生では過去二十年あまり、この霊性の道を少しずつ歩んできましたが、時と共に、ヨーガ、修行、奉仕の果てしない深さと、自分の至らなさにますます気付かされると同時に、神とグルの慈悲と慈愛の不可思議な大きさに心打たれる思いでいます。

　さてまとめましょう。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダのお教えは、日本の青年たちに、何を語りかけているのでしょうか。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、小さな自己への執着をすてろと説きます。高い理想のために生きるとき、わたしたちはおそれをしりません。おそれがなくなれば、いつわりのさとりで満足し、小さな繭のなかにもうとじこもることはありません。至高の理想を目指して、ライオンのように吼えることができます。オーム。

　スワーミー・ヴィヴェーカーナンダいわく「理想のために生きなさい。他のものにいっさいの場所を与えてはなりません。」そして「至高をみて、至高をめざしなさい。そうすれば至高に至ることができるでしょう」。

　神とグルのご加護と恩寵によって、至高なるもののみを、みて、考え、めざすことができますように。他のものにいっさいわずらわされませんように。すべての若者が理想をもち、それに向けて歩みますように。わたしたちの世界の将来は若者にかかっています。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダが、わたしたちの魂に祝福を与え、鼓舞し、いつか至高なる理想へと導いてくださいますように。